

財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部の理事として、平成十三年松山市、平成十六年今治市、平成十七年宇和島にて「語りつぐ会」の講師として、シベリア抑留体験の豊富な諸々の体験談を観衆に分り易く説明、納得させて好評のある講師としてすばらしい方で、今後も益々のご自愛のもと支部の柱として頑張つて頂きたい役員であります。

(愛媛県 山本 繁夫)

収容所正門横一カ所に 埋葬した八十〇百人を祖国に

熊本県 村 田 昭 三

昭和十九(一九四四)年十一月全満州義勇隊訓練生に、臨時軍派遣計画実施。我々北安省海倫県義勇隊萬順訓練所第五次川元中隊二百五十人中九十人は興安北省ハイラル二六四六部隊「第一九野戦貨物敵」札蘭屯駐屯地分散作戦に派遣。

駐屯地は山間を利用し大きな倉庫が建設されていた。近くに満人部隊があり、初めて見る驢馬、体は小さいが鳴き声は凄い声を出していた。この兵隊さんは召集兵にみえ優しい人達であった。班長は石川上等兵(栃木出身)、炊事班長は安田上等兵。犬の餌を日に二回頂きに行くので大変お世話になった。食事は糧秣を扱うだけあつて待遇はよく、身なりも新品同様裕福な兵隊さんに見えた。自分等は襟章がないだけで風呂も一緒、すべてが

兵隊生活であつた。

貨物廠には獣医の物資が置かれ、隣村の網津村から伊藤軍曹が係でおられた。志願組で二十二、三歳に見えた。旧宇土中出身で、通字の時雑貨を営む我が家を知つておられ、親切に酒保にも連れていかれ、甘味品などを頂き有難かつた。

貨物廠に軍犬二頭が飼われ、軍犬主の山本上等兵(大阪出身)が他に忙しいので代わりに見る事になり、入隊まで(勤務中に現役志願を志し、宮崎静夫君と北安に出かけ徴兵検査を受ける。甲種合格)五カ月ほど軍犬の訓練に励む。犬舎は十二坪程度、犬の名はキリュウとアタル。少し慣れた頃にまさかと思ひ放したら喧嘩になり、傷を負わせてしまった。犬は兵器で扱われ、大変な事をしたと思ひ、山本軍犬主にお詫びしたら、笑うてとがめはなかつた。幸いであつた。

軍犬キリュウは、一度廃犬、再用した犬で、利口ではなかつた。一方軍犬アタルは、捜索は素晴らしく、何でもできる優秀な犬であつた。満州に

は遼陽に軍犬の訓練所があると聞いていた。三月入隊が近付き荷物の片付けにかかる。たいした物はないが満順訓練所で撮つた仲間との三分間写真等を楽しみ、竹行李二個我が家に発送したが着いていなかった。

当時満州は緊急物資優先で、一般の荷物は仕方がないと思われる。

入隊は吉林八三五部隊「機動第一旅団司令部」の通称号、無線有線の機能を有する中隊、中隊長高島中尉、無線一、二、三人班、有線四班。自分以下乙幹伍長一人、古年兵五、六人、初年兵合せ三十五人ほど。自己紹介。官給品の支給、九九式小銃、帯剣が渡された。

入隊して苦労したのが軍人勅諭。覚えが悪いと古年兵のびんたが待っている。一般教練は義勇隊時代、海倫の独立守備隊から鍛えられ、一通りの事は自信があつた。演習は地形に即した電話機電線の扱い、夜間訓練は山岳にて探照灯でモールス

信号を教わる。対戦車攻撃は蝟壺に身を潜め爆薬を抱え、敵戦車を破壊する訓練が中心であった。敵戦車の死角に迫りキヤタピラに爆薬を仕掛け、己も助かる訓練も続けられた。

厳しい訓練の中に慰めは小休止の時の煙草（極光）であった。十七歳だが一人前にもらえた。

演習帰り軍歌をよく歌わせられた。兵舎に帰ると一日の銃剣の手入れが始まる。

消灯ラップで寝付けた頃に週番士官巡回。手入れた小銃の引金を点検。カチツと音、自分の銃でないか。呼ばれたら大変な事になる。一人の落ち度で全員が集合させられ、互いに打ち合わせる。対抗ビンタ。弱く打つと強く打つまでやらされる。古年兵の中にたちの悪い上等兵と三年兵の一等兵がいて、二人が打つのは編上靴でこしらえたスリッパ、帯革ベルト、これらで打たれると目から火が出るとはこのことであった。

八月九日夜中に古年兵一人が、飛行機の変わった音がする。何か違うぞ、ソ連かも。全員起こさ

れ、誰の銃と構わず我先に兵舎裏の壕に飛び降りる。頭を上げ見回すと吉林市街は飛行機投下の照明弾で真昼の様に見えた。爆音から豊満ダムに向け爆撃が行われているもようである。翌十日、部隊は装備整え貨車で東満に向け発車した。糧秣物資も積み込まれていた。いよいよ戦場に行く、志願した身である。何も心配することはなかった。どの辺りで下車したのか記憶にない。あるのは、夜から明け方まで、毎日夜の強行軍が続いた。歩きながら眠ることもあった。銃口が隣の銃口に触りカチツ音で眼が覚めることもあった。

終戦の玉音放送は広い草原に格納庫みたいな建物があり、昼の休憩時だった。ラジオからの放送で、初年兵仲間四、五人が居合わせた。日本は負けたのだ、今後どうなるか複雑な思いがした。

我々の部隊は承知いたらず、鏡泊湖方面に進み、小高い岡にたどりつき見渡すと遠くに砲撃の音がしていた。

目指すのか連れ回される毎日であった。途中目にしたのが軍馬七、八頭の群。飼い放されたのか瘦せ細り肋骨が見え、哀れな姿である。軍犬にも出会った。雨の日、泥にまみれ主人をさがしている様子。可哀相にみえ、ヨーシコイと呼ぶと、懐かしく聞こえたのが喜んでくる。連れてはいけず、自身が囚われの身である。軍服姿の婦人も見た。身を隠すためか軍帽に軍服を装い、階級をつけ、表情は厳しく見えた、どうなられたか気の毒に助けもできない。

敗戦を期に人も馬も犬もこの後、日本と付くすべてが地獄の道をたどることになる。

九月に入り部隊は敦化で野営することになり、自分は何かの用で水くみに出かけた。途中夕方薄暗くなる頃、赤ちゃんの泣き声があるので、近付いて見るとカボチャ畑に、日明に着せる着物に包まれた三、四カ月ぐらいの赤ちゃん、置き去りにされて泣いている。おそらく母親は上の子等を連れて行くのが精一杯で、足手まといになり赤ちゃ

んにはいたましが、当時は仕方ない。辛いことであつたらう。翌朝には霜で冷たくなっていた。昨日はここから少し下りた場所で水をくんだのである。朝方川に行つて気付いたのは、岸のくぼみに若い女性二人は確か三人着物姿で俯きに浮かんでおられた。柄の模様から一番大事にしていた着物を着飾り、身投げされたに違いない。戦いに敗れた国の忘れることできない惨めな姿であった。

一方兵隊の仲間ではソ連兵の言葉を信じ、日本に帰れる話が何かと伝わっていた。ある日の事、武装解除の軍刀が山積に置かれていた。皆が土産にと一瞬にして持ち去った。結局は馬鹿な事であった。シベリアに連行される時もハルピンの一つ手前の駅で防寒外套を渡され、二段に仕切られた貨車に藁を敷き外から鉄線で縛られ、満州里經由からシベリア鉄道で日本に帰ると噂が流れていた。

発車して十日近く乗った。明け方、東から太陽の光と海が小窓から見えた。誰かが日本海だと呼ぶ。一瞬色めく、汽車はバイカル湖湖畔を東に向

って走っていたのである。ここでも日本軍隊の指揮の甘さが知らされる。

シベリア本線ノボシビルスクを分岐点に、カザフ共和国アルマアタ(現アルマテイ)に通じる鉄道で途中のバルナウルを経てロストフカ(現ルプツオフスク)で下車、二十数日ぶり鮪詰めの貨車から解放された。敦化で編成した二三一作業大隊九百九十八人は第三支部に六百四人(死亡二百二十九人)、第四支部に三百九十四人に分離された。他の作業大隊から二百五十人が第四支部に加えられ六百四十四人(死亡二百二十三)。通信中隊の間はほとんどが第三支部に收容され、自分が收容される第四支部には四、五人がいたに過ぎなかった。第四支部收容所は建物、設備が悪く、古い刑務所跡とみられ、所内に営倉が設けられ、その下が地下屍室に。当初の冬はシベリアも想像以上の寒波で一度下ると止まらず、十分な暖房もなく死を待っただけで、多くの者が命を落とした。春先カチカチに凍った五体をロープで引き上げ点呼広場

農場)にトラックで馬鈴薯の収穫手伝いに連れて行かれた。農婦が掘り出したのを自分達はバケツで拾うのが仕事であった。おかしい事にところどころ残して掘るので、ここにと教えると困った顔をする。あとは捨てて置くのである。ソ連全体は食糧不足で困っている。ここだけは豊作でノルマは達成している。これ以上辛抱してもお金にならないとの事だろう。皆の前で食べるのは良いということだった。ポケットに入れることは許されなかった。

馬鈴薯のおかげで多少は生き長らえらると思つた。ここの收容所は非人間的な扱いで捕虜のわずかな食糧を闇に流す噂も出るなど。一日三〇〇グラムの黒パンにスープは青いトマト、キュウリの塩漬だけが入り、穀物の入っていない日も度々あった。酷いのは粟の皮がむいてないスープを与えたので皆が糞詰まりをおこし、大変な苦痛にあわされた。ちょうど職場でおきたので、マダムや皆の前でお尻を出し合い鉄屑でほじくる。恥ずかしさ

に並べ、櫓に何体も重ね、收容所正門横に塀から一、二メートル離し、当時の記憶から幅五メートル、長さ十メートル、深さ二メートル、自分等で掘った穴にほとんどが裸のまま埋められた。

我々の仕事は近くの農機具工場でトラクターが牽引する大型農機具部品の生産、職場は鍛工(鍛冶屋)と呼んでいた。冬場の凍りついた鉄材の切断は、滑り、危ないものだった。夏場に三、五メートルの鉄材をボイラーで真つ赤に焼き、二、三人がかりでJ型に曲げるのは大変な労働であった。汗が乾いたあと塩気で肌が白くなって見える。塩があれば生きられるとのことで、岩塩を積んだ無蓋貨車が工場の引き込み線に入る。カーブで待ち伏せ、スコップですくい落とすことも度々あった。危険は承知であった。

ある夜の点呼で、寒さは厳しく、靴が湿っていたのと油断から、自分の両足の小指と隣の指が凍傷にかかった。收容所内の仕事に就いていた時、運よく十人足らずでコルホーズ(国家援助の集団

を越し、生き抜くには仕方がない事であった。

脚気患者は、日本の軍医が訳を言うても、肥えている、大丈夫、と聞き入れない。工場まで二人で両肩を持ち、仕事場で休ませ、代わりが働いた。病人が多発し、医務室と病棟が狭いので宿舍で寝たきりの者が多くなり、下は濡れ、飯盒がすべて用を達していた。知り合いの者が雪ですすぐ程度である。一日の労働(ノルマ)が終り帰り際、他の監督の仕事で付添の歩哨が買収され、引き続き食事も与えず引き込み線に入った六十トン有蓋貨車に天井近くまで積み込まれた石炭を下ろす仕事である。夜も遅くなり寒さも厳しく、零下三〇度を超える、それでも仕事に使うなど、苛酷な労働と食糧事情が重なり、多くの犠牲者を出した。

【執筆者の紹介】

昭和三年一月四日 熊本県宇土市にて出生

昭和十七年三月 満蒙開拓青少年義勇軍川田分

所入所

昭和十七年六月 満州国北安市海倫県萬順訓練所入所

昭和十九年十一月 ハイラル二六四六部隊（第一九野戦貨物隊）

札蘭屯駐屯地分散作戦に義勇隊より派遣

昭和二十年二月 札蘭屯勤務中現役志願甲種合格

昭和二十年三月 吉林八三五部隊機動第一旅団通信中隊入隊

昭和二十年八月末日 吉林省敦化にて武装解除

昭和二十年十月 アルタイ地方ロストフカ（現ルプツオフスク）九〇一第一

昭和二十二年四月 一七八收容所第四支部收容所
沿海州ウオロシロフ（現ウスリースク）收容所

昭和二十二年十二月五日 山澄丸舞鶴上陸
昭和二十二年十二月十日 復員

宇土市公平委員、宇土市商工

会理事、法人会監事、商店会
会長

全抑協熊本県宇土支部長
（熊本県 岡村 透）